「表現の仕方」について捉えよう

○　次の文を読んであとの問いに答えましょう。

明治の終わり頃、巳之助（みのすけ）という少年がいた。ある日町に行った巳之助は、初めてランプを知りその明るさに感動する。自分の村も明るくしたいと考え、ランプを作りランプ売りとして生計を立てるようになった。ランプ屋として成功したものの、やがて村に電気の導入が決まった。そのことを逆うらみした巳之助は、区長さんの家に火を放とうとするが、商売に執着し、進化を受け入れようとしない自分の過ちに気付く。そして巳之助は、ある行動に出るのであった。

巳之助はすぐに家へとってかえした。

そしてそれからどうしたか。

ねているおかみさんを起こして、いま家にあるすべてのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜ふけに何をするつもりか巳之助にきいたが、巳之助は自分がこれからしようとしていることをきかせれば、おかみさんがとめるにきまっているので、だまっていた。

ランプは大小さまざまのがみなで五十ぐらいあった。それにみな石油をついだ。そしていつもあきないに出るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、外に出た。こんどはマッチをわすれずに持って。

道が西の峠にさしかかるあたりに、半田池という大きな池がある。春のことでいっぱいにたたえた水が、月の下で銀盤のようにけぶり光っていた。池の岸にははんの木や柳が、水の中をのぞくようなかっこうで立っていた。

巳之助は人気のないここをえらんできた。

さて巳之助はどうするというのだろう。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池のふちの木の枝につるした。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいっぱいつるした。一本の木でつるしきれないと、そのとなりの木につるした。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木につるした。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、もえ、あたりは昼のように明るくなった。あかりをしたってよってきた魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

と巳之助はひとりでいった。しかし立ちさりかねて、ながいあいだ両手をたれたままランプの鈴なりになった木をみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんできたランプ。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

それから巳之助は池のこちら側の※往還にきた。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともっていた。立ちどまって巳之助は、そこでもながくみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つひろった。そして、いちばん大きくともっているランプにねらいをさだめて、力いっぱい投げた。バリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世はすぎた。世の中は進んだ。」

と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころをひろった。二番目に大きかったランプが、バリーンと鳴って消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった。」

三番目のランプをわったとき、巳之助はなぜか涙がうかんできて、もうランプにねらいをさだめることができなかった。

こうして巳之助はいままでのしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になったのである。

（新美南吉『おじいさんのランプ』による。）

※往還…道路

一　青山さんの学級では、表現の工夫に注目してこの物語を読み、その効果について意見を交流することにしました。青山さんは――― 部の表現とその効果について発言しようとしています。青山さんの発言としてふさわしいものはどれですか。次の１から４までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

１　「倒置法」が使われていることによって、目の前に広がる幻想的な景色がより強調されて読者に印象付けられると思う。

２　同じ言葉や台詞が「反復」されていることによって、登場人物の心の迷いや葛藤がより強く読者に伝わっていくと思う。

３　「体言止め」にすることで余韻が残り、読者が様々な情景や登場人物の心情を想像しやすくなっていると思う。

４　「比喩」が使われていることによって、読者はその場の情景をより具体的にイメージすることができるようになっていると思う。

二　交流の中で、石井さんは次のように発言しました。石井さんは、どの叙述を取り上げて発言したと考えられますか。石井さんが取り上げた文を二文選んで、〰〰〰 線を引きなさい。

【石井さんの発言】

語り手が「問いかけ」るような言い方をすることで、読者に今後の展開を考えさせ、物語の世界に引き込むようにしていると思う。

「表現の仕方」について捉えよう

【問題について】

平成二十九年度の全国学力・学習状況調査の、「表現の仕方について捉える」問題の関連問題です。

【解答】

一　4

――部の叙述について、表現の工夫とその効果について捉えることができるかどうかをみる問題です。「ナイフのように光った。」という箇所に注目すると、「比喩（直喩）」であることが分かります。

○比喩は他にも、次の叙述にみられます。

「春のことでいっぱいにたたえた水が、月の下で銀盤のようにけぶり光っていた。」

「池の岸にははんの木や柳が、水の中をのぞくようなかっこうで立っていた。」（擬人法）

「風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、もえ、あたりは昼のように明るくなった。」

○二の「反復」については、次の叙述が繰り返されているところにみられます。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

「ランプ、ランプ、なつかしいランプ。」

「世の中は進んだ。」

○三の「体言止め」は、「ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんできたランプ。」の叙述にみられます。

二　「そしてそれからどうしたか。」

「さて巳之助はどうするというのだろう。」

表現の工夫として、物語の語り手が展開や状況を説明することに加えて、直接読者に問いかける叙述があります。ここでは、読者に少し考える間を与えて展開に期待を持たせ、物語の世界に引き込んでいこうとする効果が考えられます。